

## シンポジウム討論要旨

昭和52年度シンポジウムは「新酪農村について」のテーマで、12月13日(火)午後1時から、株式会社ムトウ大会議室(札幌市北区北11西4)において開催された。遠藤清司氏(酪農総合研究所)を座長として、進藤重信氏(農用地開発公団、営農施設と農機具)、金川直人氏(道立根釧農業試験場、経営状況について)の話題提供ならびに参加者による討論が行われた。

話題提供の内容は、本誌に掲載されているが、以下の要旨は当日の討論からとりまとめたものである。

座長: 「新酪」に計画段階から参画していますが、ミネソタ大学のDr. Bates、ASPACのDr. Arrow等のいろいろな批判を新酪は受けています。特に既存農家は羨望と同時に批判の目で見えており、更に世界でこのような制度でやっている所があるのかという疑問もあります。この制度では土地代、牛体代を除き、旧債が無いものと判断して草地造成の補助金が92%、機械施設費の補助金が75%です。大体1億3千万円が農家の負担金を除いた事業費です。農家の負担金は3,500万円で、財投資金を使うので利子が高く7%です。最初の入植農家8戸で試算すると、まだ据え置き期間中ですが、元利償還で355万円です。私はこれは大したことはない、いやむしろ非常にいいと思っております。それでは討論に入ります。

質問: 乳飼比はどれ位でしょうか。

進藤: 現在の所調べていないが、濃厚飼料で約3kgだと思えます。

質問: 飼養管理の労働時間は、搾乳のみの計算でしょうか。また経産牛の乳量に非常に幅があるが、どこに原因があるのでしょうか。

金川: 先ず、全て労働時間に含まれます。それから、乳牛の質の差、飼養管理の細かい配慮の差、濃厚飼料の給与量の差によるものと思われま。

質問: 287戸の既存農家の問題解決のため、地域全農家を対象とした新酪計画となったと聞いていますが、入植者以外の残りの農家の現状はどんなものでしょうか。

金川: 現況は、42ha/戸、42.5頭/戸になっています。(本誌金川氏の項、表3参照)

進藤: 交換分合して、移転する農家の施設を作っています。また30頭を50頭に規模拡大したい農家に対し、増築、気密サイロの新設を農林省と接渉中です。

質問: 草地の生産性ですが、4.5t/10aの目標は9年間で実際達成できるのでしょうか。昭和52年でもう下がっているようですが。

金川: 9年間利用での4.5tは大変だろうと思えます。当初、4t/10aが妥当だと考えていまし

たが、現在4.5t以上の計画が主流だし、努力によって確保しているようです。少ない面積では、施肥量アップによって可能とするデータもありますが、長期間利用では確かに大変だと思います。しかし粗飼料の確保量は余裕のある飼料計画になっています。

質問： 施設の件ですが、南北軸、東西軸のどちらを考えたのでしょうか。北側窓をはめこみ（コンパネ）等にし、東西軸の方が良いのではないかと思います。真空サイロはボトムアンローダのようですが、パドックで青刈り給与にすれば、トップアンローダの方が安く良いのではないのでしょうか。パドック、屋根の水処理の件ですが、滲汁が側溝に入っていますが、公害問題を考えると、滲汁溜めにためて処理する方が良いのではないかと思います。

進藤： 北側窓無しの方がありますが、当該地帯の冬の光線を充分利用するため、南北軸で午前午後牛舎内に陽が入るのが一番望ましいと思います。ただ、東西軸の場合、南北の窓数に差をつけて結氷を避けることはできます。アンローダは経費的にはトップの方がずば抜けて安く、ボトムは細断をシビアにしなくてはならない等の欠点がありますが、ボトムは詰込時だけに上に登ればよく、トップは作業時には常に上に登らねばならないし、トラブル時などの作業の危険性が大きいと思います。パドックを十分活用するため、昭和51年から牛舎から3m離して設置しています。昭和50年は滲透枘を一つ設置し、パドック汚水を沈殿させ、パーラーの汚水も入るようにして、上澄液だけを流すように設計しました。しかしうまくいかず、もう一個低位に設置する必要があると思います。滲汁を全て滲透させることは不可能なので、第2溜枘が満杯になったらスラリースプレッダで散布するより仕方がないのではないかと思います。

座長： トップ、ボトムのアンローダ、気密サイロについて他の御意見はありませんか。施設に75%、草地造成に92%の補助が出ているので賛成するが、全額を融資、自己資金でやるとしたら意見は違ってくると思いますがどうでしょうか。

質問： 気密サイロ使用上の問題ですが、切断長の件や、水分50%のもののみでも詰め込むことは可能ですか。

金川： 水分50%まで落すのは、かなり厳しいですし、水分65%以下なら許容できます。切断長と水分の関連で、長くなった場合トラブルが出てくるようです。

土屋： ハーベスタの切断刃は、1～2日の作業で丸くなるが、研磨や受け刃との間隙の調整で一定の切断長が期待できます。水分は、50%は現実的には難しい。アンローダの能率から見ても、65%以下には出来るだけ調整する必要があると思います。

金川： 実際の調査では、10mm以下が11%で、大半が11～30mmです。指導はしていますが実際の現場としては難しいようです。

質問： フリーストールが漸減してきているが、牛舎様式別の乳生産性の傾向と死廃用率との関係はどうか。

進藤： 生産的につかむのはまだ早いと思いますし、牛の質が入殖農家により異なっています。根室地区の酪農家は今まで頭数増を旨とし、新酪に入って50頭となり、これから牛の改良へ進むというところでは。

金川： フリーストールでは、当初個体乳量の低下があるのではないかと心配しましたが、低下はありません。牛舎の両型式による差はほとんどなく、むしろ乳牛の質の問題と思います。

座長： 死廃用牛が12%と高いようですが。

土屋： 一部骨折もわずかに見られましたが、老令牛、乳房炎牛の淘汰、更新による廃用が多いです。牛舎タイプ別では、フリーストールが若干多いようですが、これはフリーストールに合わない牛を事故でなく廃用にしたためです。

質問： 搾乳用ではフリーストールは漸減と解釈して良いのでしょうか。スタンションでは若牝、乾涸牛の場合でも係飼するのでしょうか。

進藤： フリーストール、スタンションの様子をみて、フリーストールでは牛が清潔でないこともあって減少していったようです。しかしいずれ70頭も飼いたいと希望する人はフリーストールに執着しています。哺育はペン飼であり、当初育成もペン飼でした。最近慣らすために、育成牛舎にスタンション10カ所を設けて、乾涸牛、未経産牛も繋いでいます。

質問： 放牧牛の乾草給与が2kgと少ないが、無脂固形分の低下はありませんか。また、高タンパク低カロリー飼料から来る糞の固さ、牛体の汚れはありませんか。

伊藤鉄： 脂肪率、無脂固形率は道央に比べ、根釧は低い傾向にあります。乾草給与では十勝で4~5kgであり、根釧では全く給与していない農家もかなりあり、おそらく半分以上あると思います。また放牧中後期に乾草食い込みがかなり増え、8月以降には乾草が不足するだろうと思います。飼養標準に比べ、冬で140~150、夏は倍のタンパク増給がみられます。牧草主体の飼養体系ではタンパクが多くなっても、とりあえずTDN摂取量を増やす方向で考えています。糞の件ですが、根釧の牛は夏冬通し非常にやわらかいようです。

進藤： 牛の汚れは、一般にフリーストールでひどいようですが、牛床の長さ、牛体の大きさにも関連しているようです。根釧では大型牛指向が強いようです。D型ストール(対尻式)ではカウトレーナを使い、牛舎はきれいになっています。

三浦： 集団化すると、年々牛舎の汚れ、施設の老朽化で、トラブル、病気の出方が問題となってきます。どうか長期の追跡調査をするように望みます。

質問： 入殖者の卒直なフィーリングをお聞かせ願いたいと思います。

進藤： 先に向って明るい見通しを持っており、新しい入殖者も先輩の施設、成績をみて心配しておりません。今までの管理だと、6,000 kg搾れる牛も4,000 kgで止まっていたのが個体能力はまだまだ開発していけるのではないかと思うし、現在も1頭当り乳量は上がっています。

金川： 入殖者は協力してやっけて行こうという気風が強いようです。

座長： 355万円年賦償還は、最初の入殖者であり、その後資材の値上り等で500万～600万円償還の農家も出てきています。しかし入殖者の意気は盛んで、入殖者が優秀であったこともあって、計画を上まわって乳量がでています。これは「新酪」計画が始めてです。新酪の前途は明るいものと思います。それではこの辺で討論を打ち切りたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)